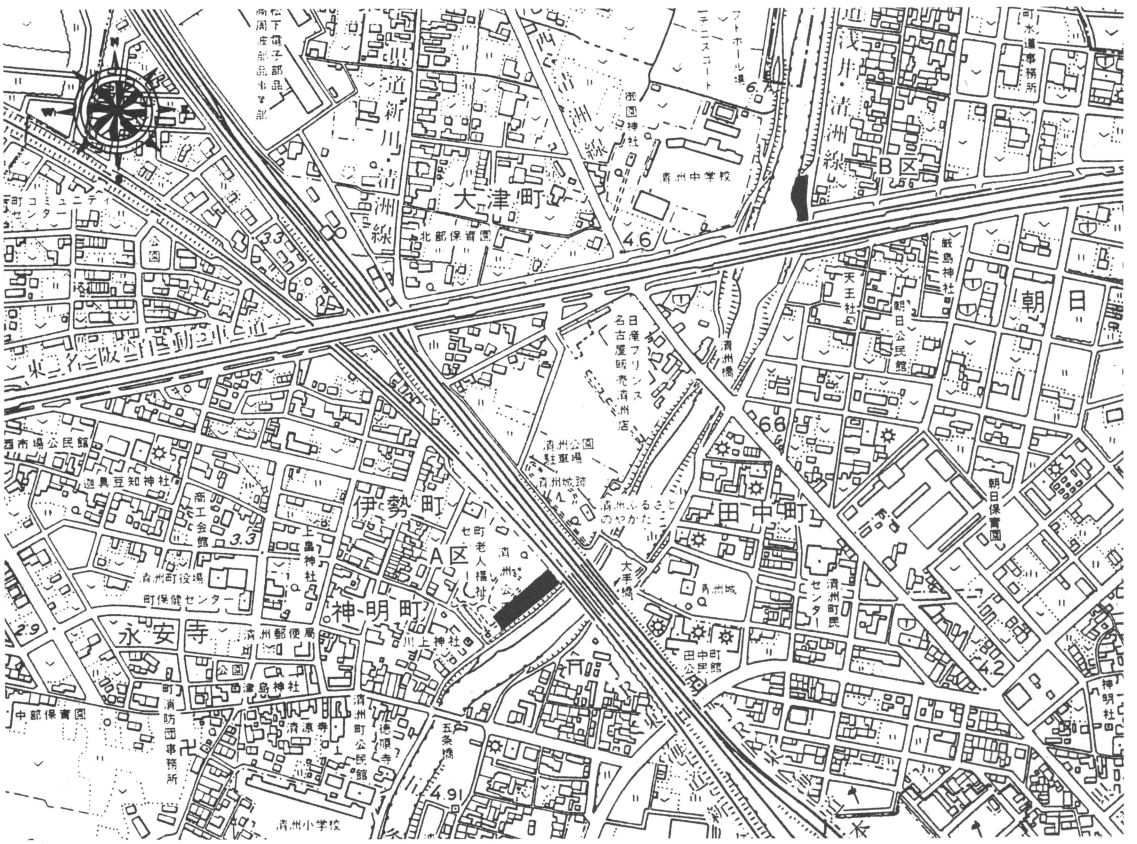
清 洲 城 下 町 遺 跡

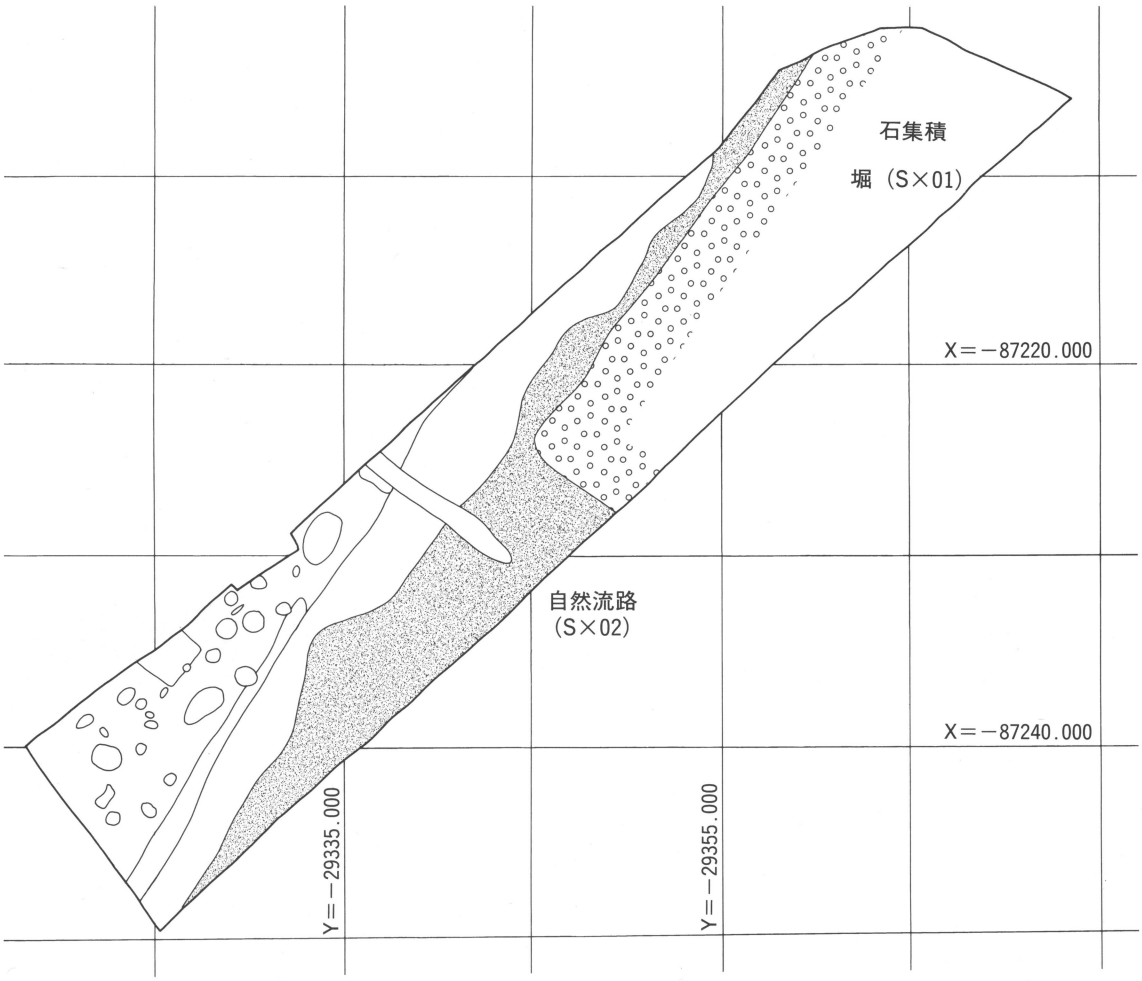
調査の経緯　清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町に所在する。本遺跡は、濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は昭和59年から継続されており、今年度は五条川改修に伴い1500㎡（A区1200㎡、B区300㎡）の調査を、平成６年10月から平成７年３月までの予定で実施した。

調査の概要　A区は、五条川右岸の清洲公園東端に位置する。この地点は清須城の本丸推定地にあたり、昨年度の調査地点C区の北東に隣接する。調査成果のうち、特筆すべきは清須城の堀の肩と考えられる石積の遺構（ＳＸ０１）が検出されたことであろう。この遺構は『清須村古城絵図』（名古屋市蓬左文庫蔵）にも描かれている本丸東側の内堀と考えられる。石垣の裏込めとして使用された石（こぶし大）の集積は、廃城時に石垣の巨石を抜き取ると同時に崩れ、さらに建物から崩落した多量の瓦がそれに混じって出土している。また石垣最下段の巨石が抜き取られずに数カ所残存している。堀については過去の調査（63Ｃ区、89Ｅ区）でも中堀の一部が検出され、部分的に石垣と敷石が確認されており、その成果との比較検討も今後の課題となろう。出土遺物はその大半が瓦であり、軒瓦（金箔瓦を含む）、平瓦、丸瓦、道具瓦、飾瓦（金箔瓦を含む）、鯱瓦など種類、量とも非常に豊富である。特

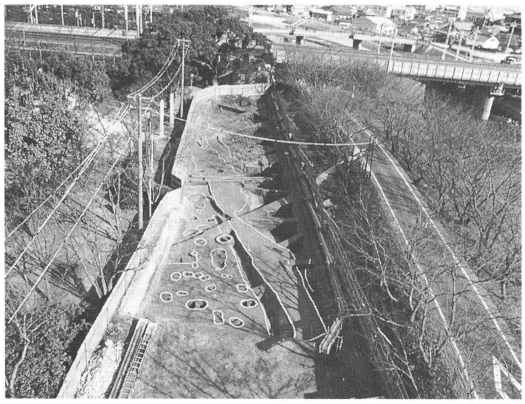


第１図　調査区位置図（1：10000）

に完形の瓦が多く出土したことは瓦の研究により多くの情報をもたらすであろう。なお土師器皿を主体として大窯Ⅰ～Ⅱ期に所属する遺物を出土したＳＸ０２は自然流路の可能性が高く、埋土の状況からごく短期間に埋められたことがわかる。堀を築く際の大規模な土木作業を想像させるとともに、五条川右岸における城下町前期の様子を知るうえで貴重な資料を得ることができた。　　（福岡晃彦、神谷知幸、蟹江吉弘）



第２図　Ａ区主要遺構配置図（１：400）



Ａ区全景　南西から

Ａ区ＳＸ01　内堀コーナー部分上面　東から